

フィリップス・アカデミー創設の背景

大 下 尚 一

この宇宙の偉大なる創造の大計画のもとで、人類が創造され、知識と徳において心が向上をとげるといふを、少しでも考えてみよ。また、無知と悪徳、無秩序と惡行の蔓延について、さらにかかる事態が生みだす直接の傾向と結果について、少しでも考えてみよ。そうすれば思慮にとむ人なら、これらの惡の源泉とそれに対する救済策を見出そうと熱望するに違いない。そして若者の心の資質——非常に敏感に諸々の影響を受け、しかもその影響を持ち続ける——を少しでも知るならば、青年期は大切な時期であることが認識される。若者たち自身と共同社会とが将来どうなるかは、青年期を向上のために用いるか無駄にするかに懸かっているのである。

上記のこととを眞剣に考え、青年期を軽視する風潮の広がりを見るとき、われわれのうちに苦痛に満ちた心配が高まるのである。それ故、以下の譲渡において、恩恵を与えて下さる天の神に対しつつましい捧げものをすることを決めた。そして神はそのお力によつて、ペブリック・フリー・スクールまたはアカデミーの設立を支持して下さるものと信じる。この学校における教育の目的は、若者が、一般に教えられている英語、ラテン語、作文、数学、諸科学だけでなく、人生の大目的と眞の職務とを学ぶことである。（フィリップス・アカデミー憲章の前文）

初めに

密航に成功した新島襄がアメリカで初めて入学した学校は、マサチューセッツ州アンドーヴィー（Andover）のア

イリップス・アカデミー (Phillips Academy) である。フィリップス・アカデミーは、現在もアメリカにおける有数の寄宿制の私立中等教育機関として著名であるが、この学校が一七七八年創立以来ニューイングランドの文化に根を張ってきた伝統を有することは、その特質として強調されなければならない。本稿でフィリップス・アカデミーの設立期の素描を試みるのは、ニューイングランド文化に対する史的関心からであるが、それはまた新島襄とアメリカとの出会いについて理解したいという欲求に支えられている。⁽¹⁾ めるにアメリカ教育史を見るとき、アカデミーについてわがくにではあまり知られておらず、アメリカでもアカデミー研究は少ないといふことも、付言しておきたい。⁽²⁾

(一) 新島襄とアンドーヴァー

新島がボストンの北方約二十マイルに位置するタウンであるアンドーヴァーで学んでいた南北戦争直後は、急速な変化がニューイングランド地方にも押し寄せていたが、ピューリタン的風土に受継がれてきた価値観や慣習はなおもタウンの諸施設にも人々の生活にも生きた力を保っていた。変化の時期であることが、かえつてニューイングランドのタウンにおける伝統を目立たせていたかもしれない。新島は外国人としての観察者の方と探究者としての目を併せ持つことによって、この時期のアメリカ、とくにニューイングランドの状況をよく把握していた。彼は変化と伝統を持つ一面性として見るのでなく、それを現実のキリスト教文明として、できるだけ一体的に理解しようとしている。新島に新島のアメリカ観の特色があると思われるが、彼にアンドーヴァーというニューイングランドのタウンで生活する体験がなかつたならば、かかるアメリカ観が育つたかどうか、疑問である。

新島がアンドーヴァーについて詳細に記述した書簡は、自分のアメリカ体験をつとめて客観的に伝えようとした記

録であり、彼のアメリカ観の原型をなすものであるが、われわれはそこに典型的なニューアイランド・タウンについての描写を見ることができる。それはユートピア的であるとともに、実際的でもある。公私の学校、医療機関、福祉施設、生活態度、食生活、道路、交通、工場、四季の自然等々の説明を通して、当時のアンドーヴァーがいきいきと再現されている。⁽³⁾それを新島は、完全な小世界のように描いている。新島にとって、五つの大陸をまたにかける志を抱き、国禁を犯してたどりついたのが、アンドーヴァーという小世界だったことは、いかなる意味を持つのであるか。これは新島理解にとって興味ある課題であるが、それについて、ここで立入る準備はない。ただ、ヨーロッパ諸国の視察旅行中にハーディー夫人宛てた手紙にしたためたようだに、アンドーヴァーの生活体験は彼にとって欠くことのできない精神的活力の源泉になっていたことを、指摘しておこう。⁽⁴⁾

イギリスから移住してきたピューリタンたちは、ニューアイランドに共同社会としてのタウンをつぎつきと打ち建てることによって荒野を開拓していくたが、その背景にピューリタン的意識とともに農民ユートピア的願望が見られるなどを、最近のタウン研究は示している。アンドーヴァーも初期に建設されたタウンの一つである。その意味で新島がアンドーヴァーに完全に近い小世界を見たことは、すでに指摘した彼の鑑識眼に鋭敏な史的感覚も備つていたことを示している。もちろんニューアイランドのタウンは、たえず変化をこうむりつつ発展してきた。大きく言って十八世紀後半と十九世紀の二、三十年代が、変化の波が高まつた時期である。前者では、人口と地理的拡大によって、タウンの社会的構造に変化が目立つようになった。後者では、産業革命によって工業化の影響がニューアイランド各地に現れていた。

しかしアンドーヴァーは、他のタウンと比較して、伝統を生かして発展してきたという特性が顕著だと見えよう。新島がアンドーヴァーで触れたのは、このような変化と伝統とが実際に一体化しているタウンの様相ではなかつたで

あるうか。アンドーヴァーがかかる特性を保つたいとは、ハイリップス・アカデミーの存在が果した役割が大きい。一八〇八年創設のアンドーヴァー神学校 (The Andover Theological Seminary) や女子教育のため一八二八年に創設されたアボット・アカデミー (Abbot Academy) も、ハイリップス・アカデミーをもじりて、アンドーヴァーのタウンに根お下ろした。またアンドーヴァーは孤立した閉鎖的世界ではなかつた。それば、これらの学校を通して、このタウンが大きい世界に開かれていたからである。新島が最初はアカデミーの生徒として、またアーモスト大学卒業後は神学校の学生としてアンドーヴァーで生活したことは、それを端的に示している。

(11) ハイリップス家の名望家たち

ハイリップス家の初代は、マサチューセッツ湾植民地の総督ジョン・ワイン・スロッピーと一緒にアーベラ号で一六三〇年に大西洋を越えたジョージ・ハイリップス (George Phillips) である。彼はウインスロップからの信頼されていたケンブリッジ大学出の聖職者で、移住後は、ウォータータウン (Watertown) の建設に牧師として貢献した。ウォータータウンは植民地で最初に出来たタウンの一つで、一六三二年に総督が各タウンに課税しようとしたとき、タウンの承認を経ていない課税には応じられないとして、これを拒否したことでも知られている。この事件は総会議 (General Court) にタウン代表が出席するようになる契機を提供したが、それはタウンの自治志向が、植民地創設当初から強かつたことを表している。同時にわれわれは、その指導者の一人であつたハイリップス牧師の独立心をうかがい知るといふことがわかる。

ジョージは移住直後に妻を失い、幼い子供たわを片親や育ての重荷を負わねばならなかつたが、彼の上の子供のサ

サ缪エル (Samuel) が、アンドーヴァー・アカデミーの設立者たちの祖先にあたる。サ缪エルは、奨学資金をえてハーヴィード大学へ聖職者となり、ロウリー (Rowley) の教会の牧師として、一六九六年に死んでしまった。その地に留まつた。彼の子の二代目サ缪エルは、聖職者の道を選ばず、金網工師になってセイラムに居を定めた。彼については生没年（一六五七—一七一一）以外はほとんど知られていないが、フィリップス家の資産は一代目 (1) のサ缪エルによつて、基が築かれた。

彼は長男、二代目のサ缪エルをハーヴィードで学ばせた。このサ缪エルは、聖職者として生涯を送つたが、彼がアンドーヴァーの教会に招請されたことから、フィリップス家がこの地に定着するようになる。この牧師サ缪エルの子供のサ缪エル (四代目) と孫のサ缪エル (五代目) たちによつてフィリップス・アカデミーが創設された。四代目と五代目のサ缪エルはどちらも聖職者にならず、アンドーヴァーで資産の運用に携わることも、公職に尽くした。〔（）〕や各世代の混同を避けるため、アンドーヴァーに来てからのフィリップス家のサ缪エルたちを牧師サム (三代目)、名士サム (四代目)、判事サム (五代目) と記すことにする。四代目と五代目を、シニアードとジュニアードで区別することもある。」

牧師サムは一七〇八年にハーヴィードを卒業、その後も神学の勉強を続けていたが、アンドーヴァーの南地区に住む人たちが地理的に近い教会の設立を欲し、ノース・アンドーヴァーから分れて新たに教区を設置したため、一七一年にサウス・チャーチの牧師に任命された。彼は神学の学識にすぐれ、正統的カルヴィニズムの教義に立つ厳格な信仰をもつていた。しかし、やがてアンドーヴァーにフィリップス家が力を持つようになった背景には、牧師サムの個性的な牧会の態度が影響している。彼は祖父の遺産によつて多少の資産を有しており、生活様式は単なる牧師のものではなかつた。奴隸を持つていたとも、その一例である。しかし、彼は贅沢であったわけではない。家族の祈禱

のおりには、ローソクを消したと伝えられている。資産があったからといって、教員が牧師に対する経済的支えをおろそかにする場合には、これを遠慮なく非難した。不倫と、葬式などでの過度の飲酒を厳しく戒め、商取引にともなう快楽的つきあいを叱責した。牧師サムは自分をタウンのモラルの統治者とみなしていたのである。礼拝を司るために教会へ向うとき、牧師サムは妻と並んで、子供たちを後に従えて行進した。そして牧師夫妻の両側には、黒人奴隸が伴っていた。これを教会の会衆は起立して迎えたと言うが、権威を保つことが、彼の生活態度の基本であった。経済的力を蓄え、日常生活において世俗的威儀を大切にすることは、聖職者の使命と一つになっていたのである。

牧師サムは一七七一年の死まで、六十年間、敬虔と威儀とによつて住民の生活に支配的影響力を保つた。

牧師サムの三人の息子、サミニュエル、ジョン(John)、ウィリアム(William)がハイリップス・アカデミーの創設者に名を連ねることになるが、代表的存在は一七一五年に生まれ生涯アンドーヴィアに留まつた四代目のサミニュエル、即ち名士サムである。彼もハーヴィアードで学び、優秀な才能を示したが、牧師にはならなかつた。ハーヴィアード大学卒業後、一時アンドーヴィアで教員を務めてから再度ハーヴィアードで学び、一七三七年にマスターを得た。だが彼は、これだけの教育を受けてアンドーヴィアに帰り、自分の家を持つて商売を営んだ。同年ノース・チャーチのバーナード牧師の姪、エリザベスと結婚した。名士サムの商売に関する記録は残されていないが、父譲りの勤勉と倫約を身につけ、しかも商才に恵まれていたと思われる。彼はアンドーヴィアでも最高位の富を築いていた。学識と富、誇りある聖職者の家系、これらは四代目サミニュエルにアンドーヴィアの名望家としての地位を用意するに十分であった。

名士サムの弟ジョンは、兄の引き移しのような人物だと言われる。彼はハーヴィアード卒業後、アンドーヴィアには戻らず、奥地のニューヘンプシャー地方に移り住んだ。この地で資産家の末人サラ・ギルマン(Sarah Gilman)

と結婚し、自らも商才を發揮して成功、ニューハンプシャーのエクセター(Exeter)地方第一の資産家となつた。」うしてジョンも地方名望家の地位を確実にした。ボストンへ出た弟ウィリアムは、兄たちほどではないが、フィリップス家の一員としてひけをとらない社会的地位を手にした。

名望家の地位は、安定した生活を楽しむことによって保つことはできない。それには地位にともなう義務を果す必要があり、これは端的に言えば、公職につくことでかなえられる。名士サムにその機会が訪れるのは、エセックス・カウンティの治安判事の職が要請されたときである。名望家に求められるいま一つは、家門を守ること、即ち子弟の教育である。名士サムの息子サミュエル(五代目)に対する態度には、普通の親の期待を越えた、敬虔と誇りと誠実な努力に溢れている。一つのエピソードを例としてあげよう。ハーヴィードに学んでいた息子のサミュエルは、慣例どおり家の社会的地位によって席順を決められていたが、名士サムは、治安判事という自分の地位に比して息子に与えられた席順は不適当だと大学当局に抗議した。名士サムの訴えはかなえられたが、彼は息子に手紙を書き、多くの目がお前に注がれているのだから、傲慢に見える振舞をとくに慎むよう厳しく忠告している。

判事サムは一七五一年、アンドーヴァーに生まれた。彼は六四年に、少し離れたサウス・バイフィールドに前年に設立されたばかりのダマー・スクール(Dummer School)に送られ、三年後にハーヴィードに入学する。名士サムが息子をダマー・スクールに入れたのは、地元のグラマー・スクールよりよいといふだけで、とくにその教育方針に共鳴していたからとは思われない。しかし判事サムがアカデミーの設立を思い立つたことと、少年時代のダマー・スクールの経験とは、無関係とは言えない。校長のサミュエル・ムーディ(Samuel Moody)は古典の学識に優れていただけでなく、当時とすればかなり自由な教育理念を持っていて、サムは学校の雰囲気を楽しむことができた。教科には校長の意向が重視され、古典語のほかフランス語が教えられ、数学や理科には時間を割いていない。音楽の練

精神や身体のための川泳ぎも、行われた。

ハーヴィアードは、五代目のサミニユエルが学生となつた六十年代の終わり頃にはピューリタン的氣風はすっかり後退していくようで、享樂的行為が目立つた。これは革命前夜の社会的情勢と無関係とは言えないが、サミニユエルの日記を見ると、学生の政治的関心はあまり高まつてはいない。サミニユエルはかかる状況の下で、信仰心が損われないかを何より気使つていていた。しかし彼がハーヴィアード時代に得た宝は、妻のフォイエビ（Phoebe）であった。彼女の父は法律家で、ハーヴィアードの名譽あるオーヴァーシャーも務めた名士、フランシス・フォックスクロフト（Francis Foxcroft）である。五代目サミニユエルは一七七三年にトイービと結婚して、アンドーヴィアに落ち着いた。こうして彼も聖職者にはならず、名望家としての条件を整え、判事サムへの道を踏出した。

このとき、祖父の牧師サムは一年前の七一にこの世を去つており、残されたフィリップス家の父子にとっては、独立革命の荒波を地方の指導者として乗切つていく試練が待つていた。だがそれは、名望家としての力を發揮する機会でもあった。彼らは愛国派として住民の声をまとめ、公職につくための信頼を増していく。とくにジュニアは責任感と企業家精神を併せ持つて事態に対処した。これをよく示すのは彼が、一七七六年の始めにワシントン指揮下の大陸軍のために火薬の製造を始めたことである。苦労の末、一応の成功は収めたが、二度も爆発事故で大きな損害をこうむつた。しかし火薬製造によってフィリップス家の名声はあがり、ワシントン将軍の知遇を得た。ところで何より注目すべきことは、フィリップス家がジュニアの抱負に基づきアカデミーの設立を実現させたのが、独立戦争中の一七七八年四月であったことである。そのときワシントン軍はまだ、ヴァレイ・フォージの苦境から抜けだしていなかつた。

(II) フィリップス・アカデミーの創設

マサチューセッツ湾植民地は一六四七年の法律で、五〇家族以上のタウンには教師を雇つて子弟に読み書きを教えること、一〇〇家族以上のタウンにはグラマー・スクールを設置することを、それぞれ義務づけた。それより以前の一六三五年にはボストン・ラテン・スクールが出来ているが、これは例外で、四七年の法律の具体的な成果も高く見積もれる状態ではなかった。ハーヴィード・カレッジが早くも一六三六年に創設されたことを思えば、ニューヨーク・ラングの中等教育は不備なままに置かれていた。この意味でフィリップス・アカデミーの設立には、大きな意義が認められてきた。それはまた、一九世紀前半に全国的高まりを見せたアカデミー教育の先駆としての評価も与えられている。しかしわれわれは、フィリップス・アカデミーの誕生が先見の明によるよりは、一八世紀後半のニューヨーク・ラング社会を反映したものであることを忘れてはならない。

まずニューヨーク・ラングのグラマー・スクールの実情を考えれば、フィリップスたちのような名望家が改善策を求めたことは、容易に理解できる。判事サムが学んだようなダマー・スクールも、造られていた。古典教育に关心を抱いた牧師たちはかなりいたと想像することができるし、その中に理想主義的な実践家もあったことだろう。しかし現実には多くのグラマー・スクールの教師は大学でたての若者であったが、そのほとんどが二、三年のうちに去つていった。その原因には、待遇の悪さがつねに指摘されているが、おそらく教員の待遇や教育条件の改善を阻むような、あるいはそれを必要としないような諸要因があると言えよう。

それではなぜ、フィリップス家の人々は、アカデミーのために全力を傾けたのであろう。第一は、名望家として資

産を有していたからである。第一は、教育に対する理念と確信である。第三は、目的を共有しうる協力者の存在である。第四に、実行を要請する現実認識である。第一の資産については、すでに述べたとおりである。しかしこの事業に対するジョンとウイリアムの協力は驚くべきである。その理由をわれわれは、ハイリップ家の伝統のなかに、ある程度、読みとることも許されるであろう。

第二点に関しては、アカデミー設立を考えたのが、若いジュニアードであることを見落してはならない。彼がいつこの構想を得たかを明確にするのは困難であるが、ジュニアードが中等教育の改善を具体的に訴えた手紙が資料として残っている。第一通は友人のエリザベス・ペアソン（Eliphaz Pearson）によるもので、これは父のサミヨエル宛てられたものと推定される。ペアソンについては第三点の援助者として言及するが、彼がアンドーヴァーに居住するようになる一七七四年以後、たぶん七五—七六年ころに第一の手紙は書かれたとされている。ここでは、古典教育の有用性や価値への疑問が強調され、また奨学資金によって勉強する者への批判など、現状に対する不満が指摘されているが、父宛てとみられる第二の手紙では、これらが影をひそめ、現状への反省や正統な宗教信仰の必要が論じられるとともに、学校設立の準備についての検討が述べられている。このことからジュニアードは、ペアソンとの意見交換を通じて古典教育を重視する立場を受け入れたと考えられる。

ジュニアードは、ミルトンが実践的科目を重視した学校の必要を説いた教育論を読んでいたであろう。ベンジャミン・フランクリンによるアカデミー論についても、知っていたかもしれない。しかし、これらから大切な示唆を得たとしても、彼は学業と宗教心との両立した教育について、具体的に考察をめぐらしていたのである。それは、日常生活と切り離しては体得できない教育である。そして、この認識を彼に呼びおこしたのは、憂うべき社会の現状に対する関心であった。

第三の協力者については、ピアソンをあげなければならない。彼はダマー・スクールとハーヴィードでの友人で、すぐれた古典学者であった。ピアソンは協力者というより、推進者であった。ジュニアードは先述の手紙で、立派な校長（マスター）を得られるかどうかで学校の成否は決まると訴えている。ピアソンはフィリップス・アカデミーの校長として、ハーヴィードの教授に招かれた一七八六年まで、全力を傾けた。このような専門家とフィリップス家の親類のほかに、アンドーヴァーの住民を協力者として忘れてはならない。

第四の点に関しては、すでに言及したように、父宛と思われる手紙の冒頭で強調されている、過去三十年間の人心の変化を指摘したい。日々認められる社会的変動は、公的・私的美德の衰退現象と若いサミニエルには写ったのである。ここで一言ふれなければならないのは、アンドーヴァーの社会的変化である。最近のニューアイングランドの社会史研究に影響を与えたグレーヴンのアンドーヴァー研究によれば、十八世紀の後半からタウンの住民の増大と多様化が顕著になったことが実証されている。それまで秩序の維持者であった有力者——家父長的権力を握っていたタウン初期からの有力な家系——の地位に変動が起こりはじめ、それとともに人々の間には不安感が広がっていた。それはまた、タウンにおける近隣が果していた教育的機能が失われていく時期であった。フィリップス家の人々は、アンドーヴァーでは本来の意味では家父長的家系に属してはいなかつた。しかし彼らが新興の名望家であつただけに、いつそう時代の変化に敏感であつたと言えるである。⁽⁶⁾

アカデミーは生徒の寄宿舎を用意せず、住民の家に同居させることで出発した。しかしこれは経済的理由のみではなく、コミュニティの家庭生活を改革していく意図を含んでいたのではないかと考えられる。生徒の宿泊に適した宗教的生活を、それらの家庭に要請しているからである。こゝにもアカデミー建設とコミュニティの現状に対する認識の結びつきが見られる。⁽⁷⁾

本稿の冒頭に記した前文に統いて、ハイリップス・アカデミー憲章では、ハイリップス家の資産の譲渡が明記されてゐる。それに理事会の構成や議決方法、校長や助教員の任用規程など、学校の運営が詳細に記されている。またキリスト教に関する、聖書に基づく正統なキリスト教信仰、いくつも11位一体説が規程化されていることに注意すべきである。ハイリップス・アカデミーは十九世紀への先駆的役割を果した。しかし、この正統主義的キリスト教の主張をどう位置づけるべきであろうか。本稿が依拠したアカデミー史の著者アリスは、憲章の中での点だけが時代錯誤的だと批判的見解を記しているが、このよんだショーリタン的正統性への執着が、この学校を誕生させたのであり、その歴史性に注目するところが、新島の訪れた時代のアンドーヴィーを展望するための大切である⁽²⁾。この点はアカデミーの歩みを扱う中で、あらためて考察したいと思つてゐる。

附

- (1) 本稿は資料叢書「たまごの実記」の編集的貢献の成果ではなく、アンドーヴィー・アカデミーの詳細な新しい校史を参照して記したものである。著者は Frederick S. Allis, Jr., *Youth from Every Quarter, A Bicentennial History of Phillips Academy, Andover* (Published by Phillips Academy, 1979)、この書籍によると、トマス・トマスの校長が最も多かった。 Susan McIntosh Lloyd, *A Singular School: Abbot Academy, 1828-1973* (Published by Phillips Academy, Andover, 1979)。
- (2) ハーバード大学 Theodore R. Sizer, ed., *The Age of the Academies*, (Teachers College, Columbia University, New York, 1964) を参考した。トマス・トマスの著書の資料叢書「たまごの実記」の本編の演説録は同じである。回顧録は Allis の校史に取入れられた。

- (3) 廉定三（一八六七）年三月十九日新島民治宛の手紙『新島襄全集』3（書簡編一）同朋會印版、一九六七年、111頁。
- (4) ベーネト夫人著、一八七一年十一月六日。『新島襄全集』10（新島襄の生涯と手紙）171頁。
- (5) ベーネト夫人の卒業記述の抄本。John L. Sibley, *Biographical Sketches of Those who Attended Harvard College*, 14 vols (Cambridge, 1873—1968) が収めている。
- (6) „ベーネト夫人の解説よりハタクヨウのトガリ“一論文。Sizer, *op. cit.* 127頁。
- (7) ハンナトーリーの社会構成の変化。ハーバード家譜150頁。Philip T. Greven, Jr., *Four Generations: Population, Land, and Family in Colonial Andover, Massachusetts* (Cornell University Press, Ithaca and London, 1970) 57頁。
- (8) フィリップス・アカデミーの創立を記念する講演。F. S. Allis, Jr. オルジネの意観を採用してある。
- (9) ハンナトーリーが新島襄の講義を聽取ったのは1870年5月である。Allis, Jr., *op. cit.*, 117—18。
- (10) *Ibid.*, 56.

（参考文献）新島襄全集・同志社大新島襄研究会